創世記19章23－26節 「火からの救い」

1A 火による裁き
1B 安逸にある高慢
2B 好色と不自然な肉欲
2A 妥協したロト
1B 目に見える快適さ
2B ソドムの生活
1C 力を失った証し
2C 娘を捨てる父
3C 不信仰の婿家族
4C 近親相姦を犯す娘
3B 正しい心で悩むロト
1C 主の憐れみ
2C かろうじて救われる家族
3A 御怒りからの救い
1B 罪に対する御怒り
1C やみの行い
2C 死後の裁き
3C 天地の滅び
2B 今の世からの救い
1C 試みの時
2C 天に移される民
4A ロトの妻
1B 救われる機会
2B 世の思い煩い

本文

創世記 19 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、17 章まで来ました。午後礼拝で、18-19 章を見ていきます。今朝は、19 章 23-26 節をまず読みます。「[23] 太陽が地の上に昇り、ロトはツォアルに着いた。[24] そのとき、主は硫黄と火を、天から、主のもとからソドムとゴモラの上に降らせられた。[25] こうして主は、これらの町々と低地全体と、その町々の全住民と、その地の植物を滅ぼされた。[26] ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった。」

創世記の中には、世に対する警告として、二つの裁きが書かれています。一つが、ノアの時代

の洪水です。そしてもう一つが、ここ、ソドムとゴモラに対する裁きです。イエスは、ご自分が再び来られる時を、「人の子の日」と呼ばれ、「ルカ 17:26 ノアの日に起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります。」と言われ、また、「17:28 また、ロトの日に起こったことと同じようになります。」と言われました。

けれども、このイエスのことばを聞いても、おそらくほとんどの人は、「ああ、そうですか」と思って、何の用意もしないでしょう。なぜなら、たった今の生活が楽だからです。比較的、うまくいっているからです。けれども、そういったことが来ないと思っている人がかえって滅び、いや、来るかもとして用意する人が、かえって救われます。

私たちの教会は、実は、東日本大震災と共に始まったといっても過言ではありません。2011 年 2 月の礼拝が始まりました。次の月、3 月 11 日に大地震が起こり、津波が来ました。何度も何度も、救援と復興のために東北に行きました。私は仙台出身です。そこで、実は私も幼い時に行ったことのある海岸の町を助けていました。そこにいる人々は、ほぼ全員、助かっています。津波警報が来れば、自分たちは海の目の前にいるので、すぐに高台に逃げるのです。けれども、もっと内陸の人たちが、大勢、死んでしまいました。津波が自分たちのところに来ると思わなかったからです。

自分たちは滅びてしまうかもしれないという危機感を持っている人が救われ、自分たちは滅びるはずがないと思っている人々が、かえって滅びます。そしてイエスは、ご自身が天から地上に戻ってこられ、それは、ノアの日のようであり、ロトの日のようであると言われたのです。

<u>1A 火による裁き</u>

<u>1B 安逸にある高慢</u>

私たちはノアの日については、すでに創世記 6-9 章で学びました。ロトの日でありますが、それが、まさに、先ほど話したように、「私たちは大丈夫だ。自分の生活に満足しているから。」という態度でした。エゼキエルが、ソドムの状態をこう預言しました。「16:49 だが、あなたの妹ソドムの咎はこのようだった。彼女とその娘たちは高慢で、飽食で、安逸を貪り、乏しい人や貧しい人に援助をしなかった。」

イエスは、こう祈れと言われました。「マタ 6:11 私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。」主が、このように教えていたのは、事実、日ごとの糧が今日あるかどうかわからない、という切羽詰まった人々の多くが、これを聞いていたからです。そのような人々は、見方を変えれば、信仰を働かせやすいです。日ごとに与えらえるのを見て、主が施してくださったと分かるからです。

けれども、私たちはどうですか？当たり前のように、食べ物が食卓に並んでいます。それで、神に恵みを感謝しなさいといっても、そうなりません。それが、「安逸をむさぼる」ことです。多くが与え

られている人は、それが神から来ているということを認め、感謝することが難しくなるのです。信仰に貧しくなるのです。ヤコブが手紙で、貧しい時に信仰に富むことを話しています。「2:5 私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。」

2B 好色と不自然な肉欲

それで、富に頼っていると、いろいろなものが偶像になっていきます。すべての源である神ではない、他のものを神としています。そのもっとも大きなものが、自分自身です。自分の欲望です。自分の欲が神、自分の腹が神になってきます。

その結果が何か？その代表的なものが倒錯した性行為です。結婚という男女の結びつき以外の関係を、楽しみにします。そして、その結びつきがだんだん歪み、逸脱していきます。ついに、異性だけの関係は満足しなくなります。それで、同性に手を出します。そしてついに、同性に対して集団暴行するという事態に、ソドムは発展しました。ユダの手紙にこう書いてあります。「1:7 その御使いたちと同じように、ソドムやゴモラ、および周辺の町々も、淫行にふけって不自然な肉欲を追い求めたため、永遠の火の刑罰を受けて見せしめにされています。」

2A 妥協したロト

このような時、ロトはどうだったのでしょうか？「Ⅱペテ 2:8 この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。」彼は、ソドムに住んでいました。しかも、ソドムで役人のようなことをしていました。彼の心は、ソドムで行われている不法な行いに心を痛めていました。正しい心を持っていたのです。けれども、彼は、神を畏れる者としての証しの力、影響力を持っていなかったのです。心の中では神を信じていても、まるでそれが周囲に力を持っていませんでした。

多くの日本の人が、自分のハンドバッグに、また小学生はランドセルなどにお守りを持っていますね。クリスチャンは、「そんなものは、まじないで、何の効力もないのに・・」なんて思うかもしれません。しかし、では自分自身はどうなのでしょうか？まだ、お守りのほうが、外に見えて、自分が何を信じているかを明らかにしています。クリスチャンと言っている人が、自分の心の中だけで神を信じていて、それを全く生活に示していないということがないでしょうか？それが、ロトの信仰でした。彼は、心では神をあがめていましたが、それがソドムの不法に対しては、何の力も持っていなかったのです。

1B 目に見える快適さ

それは、彼の生活に妥協があったからです。神は信じていても、自分の目に見えるものを優先させていました。「13:10-11 ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、【主】がソドムとゴモ

ラを滅ぼされる前であったので、その地はツォアルに至るまで、【主】の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。11 ロトは、自分のためにヨルダンの低地全体を選んだ。そしてロトは東へ移動した。こうして彼らは互いに別れた。」おじ、アブラハムと別れる時に、彼は、緑豊かなほうに向かって移動したのです。そしてソドムの近くに住みました。そしていつの間にか、ソドムの中に住み、それからソドムで役職にまでついたのです。

主を信じ、そのみことばを受け入れる時には、試練があります。人間的には不都合なことがあります。犠牲がともないます。けれども、いつも自分が快適さを求めたらどうでしょうか？今日は、ちょっと体が調子悪いから、教会に行くのはよしておこう、など。もちろん、体の調子が悪かったら、体を休ませたほうがよいのです。けれども、それ以前に、主に、礼拝を献げられるように必死になって祈っているでしょうか？仕事や用事が入ったら、休むなど。その前に、神の国を第一にして、仕事や用事を入れないように、礼拝を優先するように祈り求めているでしょうか？

主を神とするのではなく、自分の目の前にある快適さ、都合、損得を優先させていくのであれば、ロトと同じなのです。

<u>2B ソドムの生活</u>

<u>*1C 力を失った証し*</u>

ソドムにおいて、彼は行政に関わっていますが、集団暴行をしようとした男たちを宥めようとしています。けれども、彼らはこう言って、叫んでいます。「19:9「こいつはよそ者のくせに、さばきをするのか。さあ、おまえを、あいつらよりもひどい目にあわせてやろう。」彼らはロトのからだに激しく迫り、戸を破ろうと近づいた。」よそ者のくせに、さばきをしていると言っているのです。ロトが行政に携わっていても、相手には全然、役に立っていませんでした。

<u>*2C 娘を捨てる父*</u>

しかも、宥める時に、とんでもないことをロトは言っています。「19:8 お願いですから。私には、まだ男を知らない娘が二人います。娘たちをあなたがたのところに連れて来ますから、好きなようにしてください。けれども、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは、私の屋根の下に身を寄せたのですから。」なんと、自分の未婚の娘たちを、この暴徒たちにあげようとしているのです！当時の女性に対する尊厳の低さには驚きますが、ロト自身がそれに影響されていました。

<u>*3C 不信仰の婿家族*</u>

ロトの家に来た旅人は、御使いたちでした。彼らが、「身内の者たちをみな、この場所から連れ出しなさい」と言いました。それで、すでに結婚した娘たちの家に行きます。「19:14 立って、この場所から出て行きなさい。【主】がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」しかし、彼の婿たちには、それは悪い冗談のように思われた。」少しは心が動いて良さそうなものを、全然なのです。

4C　近親相姦を犯す娘

そして、御使いたちに引っ張られて、ロトと未婚の娘二人は、かろうじて救われます。ところが、生き残った娘二人は、とんでもないことを思いつきます。生き残っているのは自分たちだけだと思い込みました。それで、姉が妹に、こう告げるのです。「19:31-32 父は年をとっています。この地には、私たちのところに、世のしきたりにしたがって来てくれる男の人などいません。32 さあ、父にお酒を飲ませ、一緒に寝て、父によって子孫を残しましょう。」子を残さなければいけないと思って、近親相姦を犯しているのです。自分の娘にさえ、神の正しさを教えられていませんでした。

3B　正しい心で悩むロト

1C　主の憐れみ

このように、自分自身は神をあがめていると思っていても、自分の都合、自分の気分、その時の思い付きを優先させれば、地の塩の塩気を失ってしまうのです。しかし、ロトは正しい心は持っていました。妥協をしていて、心がかなり鈍くなっていましたが、それでも主は彼を見捨てませんでした。逃げるのを戸惑っていた彼に対して、御使い二人は、彼らの手をつかんで、逃げなさいと強く促します。主は憐れみ深い方です。

それでペテロは、第二の手紙で大事なことを話します。彼らがソドムから逃げて、それで火の裁きが天からソドムに下ったように、主は、地上に下す災いから、この地上から引き出すことによって、救うことをしておられます。「2:9 主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。」

2C　かろうじて救われる家族

残念なのは、ロトは救われたのですが、本当に多くのものを失いました。自分の結婚した娘たちを失いました。そして、ロトの妻は塩の柱になってしまいます。残る未婚の娘二人と、洞窟でしばらく過ごすことになりました。けれども、救われてはいます。

同じように、主はすべてご自身を信じる者を救ってくださいます。罪に定めることはありません。「ロマ 5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

3A　御怒りからの救い

1B　罪に対する御怒り

ところで、神の御怒りというのは、ちょうど罪を犯した者に対して、裁判官が正しく判決を下すのと似ています。神は、その御怒りを以下のようにしてあらわされます。

1C　やみの行い

「ヨハ 3:18-19 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。」すでに、光ではなく闇を愛しているところに、神のさばきが現れていると言います。闇の行いを好んでいるところで、それは神のかたちに造られた者たちが、自分の身を貶めているにしか過ぎず、それ自体が、神のさばきの現れなのです。ロマ１章でも、「ロマ 1:24 そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。そのため、彼らは互いに自分たちのからだを辱めています。」

2C　死後の裁き

そして、人は、この生きている時には、裁判所に行かなかったとしても、死後に必ず、すべての人に裁判が待っています。「ヘブル 9:27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」死ぬと、キリストのうちにいない者は、陰府に下ります。そして、終わりの日によみがえります。その時に神の前に出て、すべての行いに対して申し開きします。神の前にある、行いの書にしたがって裁かれます。そして、ゲヘナという、火と硫黄の池に投げ込まれるのです。

3C　天地の滅び

聖書が教えているのは、その死後のさばきだけではありません。それが、ノアの日やロトの日が表していることで、罪と不法に満ちるこの地上を裁くことです。主が、この地上に御怒りを現します。天からの災い、地上での災いが降り注ぎます。私たちは、黙示録で詳しくその大患難を学びました。

2B　今の世からの救い

1C　試みの時

そこで主は、私たちを救うと言われる時に、死後における、永遠のいのちにおける救いだけでなく、今の世そのものから救い出されることも教えています。「ガラ 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。」そして、フィラデルフィアにある教会に対して、主が約束されました。「3:10 あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。」ここの「試練の時には」と訳されているのは、「試練の時から」と訳すこともできます。全世界に来る大きな患難から、神の御怒りからあなたがたを守る、つまり救い出すのです。

2C　天に移される民

テサロニケ第一５章には、この神の御怒りのことを、「主の日」と呼んでいます。それが、盗人のように突如として来ます。しかしその前に、4 章で、主が天から来られて、私たち地上に残されている者たちを空中にまで引き上げることを約束しています。「Ｉテサ 4:16-17 すなわち、号令と御使

いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、17　それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」かつては、エノクがそうでした。神と共に歩んでいましたが、生きたまま、天に移されました。それから、水の洪水が来たのです。同じように、主はご自身を信じる者たちを、天に移されます。それから、主の日が地上に来るのです。

4A　ロトの妻

　そこで最後に、イエス様の言葉に注目します。ロトの日に、救われる機会があったのに、失った人の話です。「ルカ　17:32-33　ロトの妻のことを思い出しなさい。33　自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」

1B　救われる機会

　これまで見てきた、主の憐れみがロトとその家族にありました。すでに結婚した娘たちは、夫の言うことに従っていましたが、家に残っているのは、彼自身の妻と、二人の未婚の娘です。御使いは彼らの腕をつかんで、逃げなさいと言います。「26 ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった」とあります。これは、いつの間にか妻は、遅れて行ったということです。そして、それは、振り返りながらのことでした。ちょっと振り返ったからではなく、ソドムに後ろ髪ひかれる思いで、名残惜しくて振り返ったのです。それで、せっかく裁きを免れるはずだったのに、死海の海の塩が、一気に自分に降りかかって、塩の柱となってしまいました。

2B　世の思い煩い

　多くの人が、このようであります。とりあえず、この世にあるいろいろしなければいけないこと、自分が捨てられないもの、いろんな重荷が自分にまとわりついています。けれども、「いいから、主イエスを信じなさい。これらのものは捨てなさい。」と主は声をかけられています。ところが、自分は従っているようで、いつまでも決められないでいます。けれども、そのような中途半端の姿勢は、必ず、災いに呑み込まれるのだということです。

　自分の生活を優先させなければ、生きられないとする人は、結局、それを失います。そうではなく、主の言われることに従うために、失った人は、それを結局は取り戻します。この決断をしましたでしょうか？